

Costume and Textile

No.22

服飾文化学会会報

2011年11月

追悼 石山彰先生

徳井 淑子

本学会の初代会長を務められ、長年にわたり学会の発展にご尽力くださいました石山彰先生におかれましては、平成23年7月27日（水曜日）ご逝去されました。享年93歳でした。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

先生は昭和16年、東京美術学校をご卒業後、昭和29年にお茶の水女子大学家政学部に赴任され、昭和45年3月まで被服意匠学を講じられました。昭和45年4月に文化女子大学（現在の文化学園大学）に移られ、家政学部教授として、また文化女子大学図書館長として研究・教育に尽くされました後、平成6年のご退職後は文化女子大学名誉教授となりました。先生は日本における西洋服飾史研究を主導され、また多くの著作を通して西洋服飾史の啓蒙にちからを尽くされたことは周知の通りです。

平成12年、本学会の設立にともない会長に就任されました先生は、2期4年にわたり学会の運営に貢献くださいました。平成14年に2期目の会長に再任されました際、先生は、ご自宅に山と積まれた書物を日々手にとることができる喜びをお話になられ、また新聞広告で逸早く購入した書物はその後、必ず書評面できとりあげられるのは、いつのまにか選書眼が養われたのだろうかと会報にお書きになられていました。書物を愛され、西洋服飾史の書誌に通じた先生のご業績には畏敬の念を覚えます。先生のご功績を思い返し、また温厚なお人柄でわたしたちの研究を励ましてくださった先生に感謝を申し上げ、今後の学会のいっそうの展開に努力したいと思います。

2011（平成23）年度 第12回服飾文化学会総会・大会報告

平成23年度第12回服飾文化学会総会・大会は、5月21日（土）・22日（日）の2日間にわたって、東京都日野市にある実践女子大学を会場に実施されました。郊外のため、交通の便も良くない環境ではありましたが、天候にも恵まれ、大会には、正会員77名、非会員3名、学生会員11名、学生非会員8名の合計99名が参加して下さいました。2割が大学院生等の若い参加者であったことは大会に活気を与えていました。以下はその報告です。

1. プログラム

< 5月21日（土） >

13:30～13:35 開会挨拶

13:35～15:05 研究発表

◆座長 齊藤昌子（共立女子大学）

A-1 長着における寸法との適合性

－「和服構成演習」の授業を通して－

和洋女子大学（非） 伊藤 瑞香

A-2 被服製作教材の研究

－学習指導要領改訂を踏まえての提案－

鎌倉女子大学 ○長田美智子

岡松 恵

◆座長 佐藤泰子（元文化女子大学）

A-3 幕末・明治初期の横浜外国人居留地における洋服製造業および販売業に関する研究

共立女子大学大学院 永田麻里子



総会・大会
研究発表会場

- A-4 三井家史料『染代覚帳』考
—天和年間の小袖染色と価格—
日本女子大学大学院 沢尾 絵
◆座長 小笠原小枝(元日本女子大学)
- A-5 「幕 白綾子地檜垣牡丹模様小袖裂」
の実物調査と素材、技法の科学分析
共立女子大学 ○鈴木 理子
齊藤 昌子
- 15:20~16:50 特別講演
演題「下着」へのこだわりの心理学的背景
講師 菅原 健介
(聖心女子大学文学部教授)
- 17:00~17:30 総会
17:50~19:40 懇親会(大学4館カフェテリア)
- <5月22日(日)>
9:30~10:30 研究発表
◆座長 能澤慧子(東京家政大学)
- B-1 15世紀フランスモードにみる異国趣味
お茶の水女子大学大学院 原口 碧
- B-2 コプト服飾品の復元的調査と着装形態
の研究
女子美術大学美術館 深津 裕子
◆座長 長崎巖(共立女子大学)
- B-3 江戸時代の服飾文化と着装形態の研究
女子美術大学美術館 須藤 良子
- B-4 能装刺・袖物の前下がりの変化とその
要因について
共立女子大学・文化女子大学(非)
田中 淑江
- 10:30~10:45 休憩
10:45~12:30 展示発表ショートスピーチ
(※展示は、5/21-13:30~5/22-12:50)
- ◆座長 岡田宣世(女子美術大学)
- C-1 織物制作の柄の検討 —ほぐし緋—
相模女子大学 池田 節子
- C-2 伝統柄からのデザイン 第4報
大阪女子短期大学 内藤 千文
- ◆座長 池田節子(相模女子大学)
- C-3 繊維と金属線の融合 III
女子美術大学 佐久間恭子
- C-4 内と外
女子美術大学 横井 理子
- ◆座長 塚田耕一(杉野服飾大学)
- C-5 女子美術大学美術館が所蔵する江戸時
代前期小袖のCGによる再現と着装
女子美術大学美術館 須藤 良子
- C-6 女子美術大学美術館が所蔵するコプト
服飾品のCGによる再現
女子美術大学美術館 深津 裕子

◆座長 田中美智 (川村学園女子大学)

C-7 心地よく身体を包む

女子美術大学 佐久間恭子

C-8 マドレーヌ・ヴィオネを解体する

大妻女子大学 大網美代子

C-9 からだをつつむ ー平面から立体へー

大妻女子大学 大網美代子

◆座長 大網美代子 (大妻女子大学)

C-10 2011年秋冬のデザイン事例 ～イタリア
と日本の比較～

共立女子大学 宮武 恵子

C-11 伝統的農作業衣からのデザイン展開2

滋賀県立大学 ○森下あおい

クリエイションA・R 中川 淳子

C-12 スラッシュキルト 2題

相模女子大学短期大学部 角田 千枝

○田中 百子

◆座長 長田美智子 (鎌倉女子大学)

C-13 グレーディングのしくみ

東京家政大学 鈴木 由子

C-14 帽子

文化女子大学 水谷みつ江

思います。若い会員だけでなく皆で盛り上げていきたいものです。

発表会場では各座長の巧みな進行のもと、質疑応答が活発に交わされていました。参加者にとって有意義な情報交換、意見交換の場になり、今後の研究に役立つことと思います。



展示発表会場の様子

3. 特別講演

ファッショナブルな下着の台頭に、メーカー自らが疑問を持ち、その心理的背景を明らかにしたいと心理学者との共同研究を試みました。その研究の中心的存在であった、心理学が専門の聖心女子大学文学部教授の菅原健介先生にご講演いただきました。

ご講演は、日本におけるファンデーションの歴史から始まり、20歳代から70歳代を対象とした約1,100名のアンケート調査結果に心理学的考察を加えて進められました。下着のデザイン、補整性、ブランド性、つけ心地の観点を取り上げられ、下着へのこだわりの心理的背景として見出された「アピール」、「気合い」、「安心感」との関連や、こだわり度や心理的効用感が年齢によって異なることなどのお話をお聞きました。20歳代では機能性よりデザインで下着を選び、着ていて気分が嬉しくなるようなものを選ぶなど、下着に対する価値観が変化してきていることを改めて知ることができました。このような価値観の変化も服飾文化の一側面であったと思います。



展示発表会場の様子

2. 研究発表・展示発表

発表件数は、研究発表9件、作品展示14件でした。研究発表より作品の展示発表がかなり多かったことが特徴的でした。これは作品集が刊行されたことも大きく影響していると考えられ、喜ばしい事と思います。しかし学会誌を充実、活性化するためには、研究発表の数を増やす努力が必要に



展示発表会場の様子

4. 懇親会

懇親会会場は、移動時間を少なくするために、実践女子大学の学生食堂を利用しました。和洋混在のbuffetスタイルでしたが、量的には十分であったと思われます。

池田先生の司会のもとで、参加された多くの方々にスピーチをいただき、楽しく進行されました。特別講演の菅原先生にもご参加いただき、補足的なお話をいただきました。若い会員の参加もあり、お互いの懇親を深め、名刺交換等の交流もでき、和気あいあいの雰囲気うちに終わりました。

5. その他

まず、今回の学会開催を広告宣伝するポスターの作成に、川村学園女子大学の荻原延元先生のご尽力を得、服飾文化学会らしいデザインに拘って作成いただきましたことをご報告し、心からの感謝と御礼を申し上げます。

また会場につきましては、移動距離を短くするために、研究発表会場、展示会場を隣接する教室に設定しました。移動機が配置された広い教室がないために、展示会場を2室に配置しました。その結果、展示会場が狭く、ショートスピーチでは入りきれない状況になってしまったことを申し訳なく思います。今後、展示発表が増えるならば、場所の設定やスピーチの仕方など工夫が必要と思われます。また展示用のボディやマネキンについて、原則、発表者が用意することになっていましたが、今回は多くを会場で用意しました。今後、

展示発表等が増えていった場合のことを考えておく必要があると考えられます。

今回初めての試みとして、作品集に収録できるように、展示作品の写真撮影をプロのカメラマンに依頼して希望者を募りました。発表者のうちの6名が撮影を依頼し、順次撮影を行いました。このことを実現するためには、展示会場近くに撮影場所を設置する必要がありましたし、撮影にはかなりの時間を要しました。今後、このような撮影を継続していくには、撮影時間の設定や撮影場所の確保など検討する余地があると思われます。作品をよりよく表現する写真撮影ができたことは喜ばしいことと思います。

気持ちはあっても本校のスタッフが少なく、十分に手が行き届かなく、皆様にご不便をおかけしたことが多々あったと思います。何はともあれ、皆様のご協力を得て、第12回総会・大会を無事終了できましたことを心から感謝し御礼申し上げます。
(総会・大会実行委員長 高部啓子)

2011(平成23)年度 事業計画

◇総会・大会

日時：2011年5月21日(土)、22日(日)

会場：実践女子大学

◇夏期セミナー

期間：2011年8月24日(水)～26日(金)

会場：京丹後市禅定寺

宮津市丹後郷土資料館

与謝野町観光協会ほか

◇論文発表会

日時：2012年3月第1週 開催予定

◇研究例会 年1回 開催予定

◇服飾文化学会会報発行

予定：2011年9月下旬、2012年3月中旬

◇服飾文化学会誌〈論文編〉発行

予定：2012年1月末

◇服飾文化学会誌〈作品編〉発行

予定：2012年1月末

博士論文「JOURNAL DES DAMES ET DES MODESにおける服飾の定量的分析」とその教育活用を目ざして

大澤 香奈子

学位論文は、*JOURNAL DES DAMES ET DES MODE* パリ版1797-1839（以下*JOURNAL DES DAMES ET DES MODE*）を資料として、服飾の形態、色、表現の諸側面について定量的な分析から考察を行ったものである。甲南女子大学図書館が所蔵する*JOURNAL DES DAMES ET DES MODE* がほぼ完全なかたちが揃っており、時系列データを得ることが可能であることから、これを対象とすることで、その資料の大部分を占めるテキストとファッション・プレート*Costumes Parisiens*の両面からデータを取得することができた。服飾には知性や教養を示す流行のかたちが表れ、形態、色、表現の諸側面はその服飾を成す要素と考え、これらについて取得したデータから定量的な分析を行い、服飾を考察することを目的として取り組んだ。本研究に取り組むにあたり、長きにわたりご協力賜った甲南女子大学図書館には深謝の思いが尽きない。また、ファッション・プレートのデザイン解析については科学研究費補助金を受けて取り組むことができた（若手研究(B)20700231「19世紀ファッションプレートのデザイン解析における服飾研究のアプローチ」）。

本研究では分析資料選定を目的に資料についての基礎調査を行い、これに基づき服飾の諸側面をテキストとファッション・プレートの両面から分析することによって、スタイルの段階的推移を数値的に示すことができた。さらに服飾における色の役割、装いのコンセプトに係わる新たな知見が得られた。今後もさらにこれらの分析結果から服飾が持つ形あるものと感性的な形ないものとの緊密なつながりの検証を行っていきたいと考えている。

*JOURNAL DES DAMES ET DES MODE*をはじめとするモード新聞やそれらに添えられたファッション・プレートが過去の服飾を知る貴重で有用な資料であることは間違いない。しかし、そのような資料は所蔵する機関が限られているばかりでなく、保存・保管の問題もあり広く公開さ

れているとは限らないのが現状であろう。これまでにを行った調査・分析は*JOURNAL DES DAMES ET DES MODE*の一部であり、得られた諸結果は資料が発信した、限定された服飾についてのものであるが、それらは資料のデータベース化に活用できるものと考え、分析は今後さらに対象範囲を広げ、内容も詳細化させていく予定である。これと併せて、例えばデザインやファッションを学ぶ学生たちが、こうした資料を活用できるように、既存のシステムを利用した資料の教育活用の試みを始めている。まず進めているのがファッション・プレート*Costumes Parisiens*のデータベース化の試みである。これによって*Costumes Parisiens*が絵画的に与えるイメージ情報に止まらず、衣装の素材や装飾等についての詳細確認や、ファッションマーケット、コーディネートにかかわるキーワード検索等ができるようにしたいと考えている。

現在、名古屋女子大学短期大学部生活学科・生活創造デザイン専攻において服飾教育に従事している。ファッションについて基礎から学び、モノづくりの力と感性を磨くカリキュラムが設けられており、担当する服飾造形分野では、学生たちはデザイン力やイメージの視覚化、構成能力・表現方法、縫製テクニックを学び、その知識や技術を修得する。学生たちの指導を通して、作品制作を重ねる学生たちの縫製スキルの飛躍的な向上を感じる一方で、感性の領域を指導する事の難しさも痛感する毎日である。これまでの*JOURNAL DES DAMES ET DES MODE*についての研究をはじめ、研究活動の様々な側面で女性がいかにファッションと結びつき生きているか、あるいはモラルや価値観等の形成を含め、社会がいかにファッションと結びつき変化しているか、そのリアルな様相を垣間見てきたように感じている。服飾研究から得た諸結果や新たな知見、研究成果をデザイン・服飾教育への活用へとつないでいきたい。

(名古屋女子大学短期大学部)

2011（平成23）年度第12回夏期セミナーの報告

今年度のセミナーは、平成23年8月24日(水)～26日(金)の2泊3日の日程で、京都府北部丹後地方の京丹後市、宮津市及び与謝野町にて実施された。

丹後地方は、「縮緬（ちりめん）の里」として知られ、日本の生糸の約1／3を消費、縮緬の約6～7割を生産している日本最大の絹織物産地であり、またこの地方の山間部には、今もなお藤織りの技術が伝承されている。今回のセミナーでは、丹後縮緬とこの藤布のふるさとを訪ね、地方色豊かな歴史や文化に触れながらの講演・見学といった内容で研修を行った。

8月24日(水)

宿泊先の京丹後市峰山町「プラザホテル吉翠苑」に集合し、参加者たちがチェックインを済ませた後で、午後4時から、同ホテル会議室で、私こと柳原美紗子の司会進行の下、服飾文化学会徳井淑子会長のご挨拶に続き、同学会会員で大阪樟蔭大学・神戸市外国語大学等の非常勤講師の北野裕子先生による「丹後の織物」と題したオリエンテーション・ガイダンスを行った。1. 丹後について、2. 丹後の織物について（縮緬以前）、3. 縮緬の導入（江戸時代・享保期～）、4. 縮緬の多様化（明治～）、5. 最近の丹後織物の動向について、パワーポイントを用いて講義していただいた。

会場内には、京丹後市教育委員会の小山元孝氏と、京都府織物機械金属振興センター所長の山崎幸司氏及び技術幹の石田幸治郎氏のご協力で、16種類もの実物の織物サンプルが展示され、ガイダンス終了後、これらの様々な縮緬の反物を前に、同センターの石田幸治郎氏が、参加者の質問に丁寧にお答え下さり、時間を延長して、またしても詳細な解説をしていただいた。参加者から今回は、初日に講義があり、縮緬の概略を理解した上で見学することができたのでわかりやすかったとの声が寄せられた。なお、同ホテルのロビーには、北野裕子先生のはからいで、同町の縮緬問屋「吉村商店」より拝借した日本三景模様の美しい昭和初期の婚礼衣装も展示された。

夜の懇親会は、ホテル内宴会場で開催され、長

田美智子先生による司会で、蔵方宏昌先生の乾杯のご発声の後、地元の新鮮な食材を使った料理を堪能しながら歓談した。とくに女将のお話からナプキンとして使用されていた丹後縮緬が話題になり、宴が盛り上がったことも、楽しい思い出の一コマとなった。



田勇機業 縮緬について

8月25日(木)

朝食後、中型バス2台で、峰山町にある「禅定寺」を訪問した。ご住職の安田秀俊氏より寺宝、丹後縮緬の創始者、絹屋佐平治が1720年に誕生させたと伝えられている「織り始めの縮緬」と「小西山縁起」を特別に観覧させていただいた。縮緬は美しいシボを持つ厚手の二越縮緬とのことだった。

ご住職と一緒に記念写真を撮影した後、網野町の丹後縮緬の織元、「田勇機業」を訪れた。田茂井勇人社長より、プラダやマルタン・マルジェラといった世界的な有名ブランドのドレスにも使われているという見事な絹織物を披露していただいた。小幅でもジャケット向けなど洋装地として、今後ますます販路を拡大していかれるという。同氏のご案内で、60台もの織機を擁する工場を見学し、糸繰りから整経、撚糸、製織といった縮緬の製造工程を見て回った。とくに興味深かったのが、「縮緬の本命」ともいわれる「八丁撚糸」をつくる湿式撚糸工程で、糸を水で洗いながら、柔らかくしてから撚り、1週間かけて乾かしてつくられるという。

この後、雨脚が強くなり、次の訪問先の同じ網

野町にある「遊絲舎」へ向かった。同社代表の小石原将夫氏がバスを先導し、途中バスの中から、同氏のグループが中心になって2009年に開館した、藤布の原料である藤蔓の栽培を目的とした「藤の郷（さと）」を紹介していただいた。



遊絲社 藤布製造について

「遊絲舎」は、京都府指定の伝統工芸品「丹後藤布」の新しい取り組みが評価されて、このほどパリで開催されるプルミエールヴィジョン9月展に招待出展することになった織元。明治以来、養蚕業を営みながら絹織物、中でも帯地で生計を立てていたが、1985年頃、現在の「藤織り伝承交流館」館長の井之本泰氏と出会い、藤布に古代人の魂を感じて、技術伝承活動に携わるようになったという。藤布の能衣装や藤と絹の交織による帯地などを展示した工房を、見学させていただいた。

レストラン「天橋立ワイン」へ向かうバスの中で、藤布と小石原氏取材した「新日本紀行ふたたび～糸とともに生きる～」(NHKテレビ2007年9月2日放送)のDVDが放映され、堅い藤蔓を糸にするまでの膨大な力技の労苦を改めて思い知らされた。

昼食後、宮津市国分の「丹後郷土資料館」を訪問した。丹後の農民や漁民の衣料、ノノ(藤布)・ヤマギ・サックリなど廻船の和旗、道具類の常設展示を見学し、資料課長の横出洋二氏より、同館所蔵の有形民俗文化財「丹後の紡織用具及び製品」について、解説していただいた。

生憎の雨模様ではあったが、天の橋立を望みながら、次の訪問地、上世屋の「藤織り伝承交流館」を訪れた。山また奥に広がる棚田を抜けると、伝統的な造りの民家が佇む集落が開けて、坂の上に

真新しい木造の同館が建っていた。館長で「丹後藤織り保存会」会長の井之本泰氏により、2010年に開館するまでの歴史や藤織りの工程を解説していただいた。また藤布のジャケットや編み物のランニングシャツなどを試着して、意外と軽くて温かいことを体験し、次いで藤織りの工房や作品展示室を見学した。ここでは毎年、伝承の技術を後世に伝えていくために、「藤織り講習会」を開催しているという。全工程を1泊2日で7回、半年がかりで学ぶことができ、若い人たちが気軽に参加されているとのことだった。

同館を後に、ホテルに戻り、一日を終了した。



藤織伝承交流館 井之本氏



ちりめん街道散策

8月26日(金)

ホテルをチェックアウトして、大型バスで「ちりめん街道」と呼ばれている与謝野町加悦の旧街道へ向かった。与謝野町観光協会前の広場には、同協会会長青木順一氏や細井敏言氏、同町教育委員会の加藤晴彦氏、またガイド4名の方々が出迎えて下さり、4つのグループに分かれて、それぞ

れガイドの説明を受けながら、時折、縮緬の機織りの音が響く古い町並みを散策した。街道沿いの京都府指定文化財の「旧尾藤家住宅」では、裕福だった縮緬問屋の往時をしのばせる数々の資料を見学した。途中、突然の雷雨に襲われもしたが、無事、天橋立智恩寺門前の「対橋楼」に到着して、昼食をいただいた。ここは与謝野晶子ゆかりの宿でもあり、「晶子の部屋」などを探索し、夏期セミナーはこれをもって終了した。

なお、今回は会員・会友30名、学生3名が参加した。最後に、今期セミナー開催に、多大なご協力をいただいた北野裕子先生に心より感謝申し上げます。(夏期セミナー担当 柳原美紗子)

③服飾文化学会 2011(平成23)年度収支予算書(2011年4月1日～2012年3月31日)

	予算	前年度	前年度との比較 (△減)	備考 (単位:円)
収入				
(1)年会費	1,347,000	1,335,000	12,000	
(2)入会費	18,000	15,000	3,000	
(3)年間購読料	54,000	36,000	18,000	
学会誌				
(4)論文編掲載料	634,000	640,000	△6,000	
(5)作品編掲載料	300,000	300,000	0	
その他	0	0	0	
繰越金	537,570	1,041,210	△502,740	
合計	2,890,570	3,367,210		
支出				
(1)経費				
1)総会運営費	100,000	100,000	0	
学会誌				
2)論文編発行費	850,000	850,000	0	
3)作品編発行費	550,000	550,000	0	
4)事務管理経費	150,000	120,000	30,000	
5)通信費	110,000	110,000	0	
6)会報発行費	120,000	120,000	0	
7)事務用品費	60,000	60,000	0	
8)会議費	80,000	80,000	0	
9)交通費	190,000	10,000	180,000	監査・理事会交通費 (実費上限2,000円)含む
10)雑費	10,000	10,000	0	
(2)事業費				
1)事業費A	50,000	50,000	0	研究例会
2)事業費B	150,000	100,000	50,000	論文発表会
(3)広報費	170,000	20,000	150,000	ホームページ作成費含む
小計	2,590,000	2,180,000		
(4)予備費	300,570	1,187,210		選挙費用含む
合計	2,890,570	3,367,210		

会計報告

①服飾文化学会 2010(平成22)年度収支決算書 (2010年4月1日～2011年3月31日)

	予算	決算	予算との比較(△減)	備考 (単位:円)
収入				
(1)年会費	1,335,000	1,380,000	45,000	7,000×3 6,000×215 3,000×23
(2)入会費	15,000	20,500	5,500	1,000×18 500×5 3,000×19
(3)年間購読料	36,000	57,000	21,000	
学会誌				
(4)論文編掲載料	640,000	266,000	△374,000	掲載料 Vol.11、242,000 審査通信費 3,000×8
(5)作品編掲載料	300,000	345,000	45,000	掲載料 Vol.3、321,000 審査通信費 3,000×8
その他	0	5,040	5,040	学会誌販売 4,000 利子1,040
前年度繰越金	1,041,210	1,041,210		
合計	3,367,210	3,114,750	△252,460	
支出				
(1)経費				
1)総会運営費	100,000	100,000	0	
学会誌				
2)論文編発行費	850,000	439,782	△410,218	
3)作品編発行費	550,000	559,274	9,274	
4)事務管理経費	120,000	120,000	0	
5)通信費	110,000	45,920	△64,080	
6)会報発行費	120,000	111,295	△8,705	会報No.20,21
7)事務用品費	60,000	31,370	△28,630	
8)会議費	80,000	57,457	△22,543	
9)交通費	10,000	900	△9,100	
10)雑費	10,000	10,400	400	
(2)事業費				
1)事業費A	50,000	5,248	△44,752	研究例会
2)事業費B	100,000	90,534	△9,466	論文発表会
(3)広報費	20,000	0	△20,000	
(4)予備費	1,187,210	5,000	△1,182,210	生活科学系コンソーシアム 21年度会費
(5)服飾文化基金		1,000,000	1,000,000	
小計	3,367,210	2,577,180	△790,030	
(6)次年度繰越金		537,570		
合計	3,367,210	3,114,750		

②特別会計収支報告書 (2010年4月1日～2011年3月31日)

	収入	支出	残高	備考 (単位:円)
前年度繰越金			1,117,249	
大会余剰金	1,445			
夏期セミナー余剰金	255,021			
名簿作成費		0		
ホームページ作成費		154,701	1,219,014	
服飾文化基金				
2009年度繰り入れ	1,000,000			
2010年度繰り入れ	1,000,000		2,000,000	

会員の異動 (敬称略・五十音順)

★新入会員 (2011年4月1日～9月20日)

正会員

矢 澤 郁 美 (文化学園大学)
 石 関 亮 (京都服飾文化研究財団)
 小 磯 かおり (女子美術大学美術館)
 佐々木 美 里 (文化学園大学)
 佐 藤 由 佳 (女子美術大学美術館)
 馬 場 彩 果 (植草学園大学)
 角 田 奈 歩 (お茶の水女子大学)
 小 山 直 子 (お茶の水女子大学)
 趙 採 沃 (倉敷市立短期大学)
 三 友 晶 子 (東京家政大学博物館)

学生会員

久 川 歩 希 (共立女子大学)
 牛 村 仁 美 (共立女子大学)
 下 村 道 子 (お茶の水女子大学)
 宮 本 聡 (九州大学)
 横 井 理 子 (女子美術大学)

会報 No.22：2011(平成23)年11月21日発行
 編集発行人：服飾文化学会

事務局：112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学 人間生活学科 徳井研究室

TEL,FAX;03-5978-5802

E-mail;tokui.yoshiko@ocha.ac.jp

URL;http://www.fukushoku-bunka-gakkai.jp